

ケンムン村の大家族

鹿児島県立大島高等学校 二年 箕輪 ゆりあ

二〇××年、とある書き込みが日本中で話題になった。
「ケンムン村には近づくな」

じりじりと太陽が照りつけ焼けるような暑さの八月、ケンムン村に巨大な影をつくり、存在感を放つ、たった一本の木があった。それは、太い幹でどっしりと構え、地面まで伸びた気根を身にもとうガジュマルである。何百年もの間、村人と生き物たちの生活を支えてきている。村の方言で「ガジマラ」と呼ばれ、愛されているシンボルだ。

「ねえ、ガジマラ。ちょっとここで、羽を休ませてもいいかしら。」

ギヤーギヤーと鳴くのは、鮮やかな赤と青の羽がチャームポイントのルリカケスのルリだ。この村一番の美女として有名である。すれ違う鳥たちを、日々魅了している彼女にとって、羽のケアは欠かせない。

「もちろんだよ。」

僕はガジマラ。皆と話すことを一日の楽しみにしている。さまざまな生物に住処を提供している僕にとって、彼らは家族同然なんだ。それにしても今日は、特に日差しが

強い。毎日のようにおにごっこをして遊んでいる子どもたちも、珍しく僕の下で休んでいる。ここ最近、ずっと鳴いていた蝉たちも、流石にバテているようで、村は静かだ。

「おい、ガジマラー。おまえの作った木の実を貰ってもいいか。」

彼はアカシヨウビンのシヨウ。「キヨロロー」という声が美しいと今密かに人気を集めている。燃えるような赤色のルックスを持ち合わせていることから、村人は火の鳥と呼んでいる。

「問題ないよ。今年はたくさんあるからね。」

「おう、いつもありがとな。」

シヨウはそう言って、目の前にある木の実を二、三粒くわえたが、何を思いだしたのか、それらを落として「そういうえば」と口にした。

「さっき、村の人が面白い話をしているのを聞いたんだが、知ってるか。」

「え、知らないよ。教えてほしいな。」

シヨウの話は、ケンムン村で妖怪を見たという旅人が、ネット上に書き込み、その話題で持ち切りということだった。その人物は、宿探して真夜中に訪れ、堤防で膝を立てて座っている姿を目撃したという。頭より膝の方が高かったことが、異様な雰囲気醸し出していたらしい。

子どもくらいの大きさで、魚を食べている様子だったそうだ。

「もしかして、旅人が見たっていうのは『ケンムン』じゃないかな。」

「ケンムン、か。俺は早朝から日没まで空を飛び回っているが、そんなやつ一度も見たことねえな。」

「彼は夜に行動することがほとんどだからね。君たちは会う機会がないのかもしれない。」

翌日、星屑を散りばめた夜空の南西にある上弦の月が、二つの影を照らしていた。

「ケンムン、君は最近、この村で妖怪が出たっていう話を聞いたかい。」

「……当たり前じゃん。」

そう言っていると、登ったガジマラの太い幹にもたれ掛かり足を見つめると、ポツリと呟いた。

「やっぱり、おいら、友達つくるの諦めようかな。」

ガジマラが尋ねるより先に、ケンムンは続けた。

「だって、こんな妖怪みたいな姿を見たら、皆はおいらから離れていっちゃうに決まってるよ。」

それなら最初から近づかない方がマシだと言い、しばらく無言で空を眺めていた。

ケンムンは、昔からかなりのシャイボーイで、僕が声を掛けなければ、今もずっと独りだったかもしれない。

深夜にしか姿を現さない彼に話しかけたときの素っ頓狂な声というのは、何百年たった今も忘れない。それからよく話をするうちに、彼は恥ずかしがり屋でなかなか自分から友達をつくりにいけないからどうしたらいいかということに僕に相談しに来るようになり、真夜中の相談会は、僕の静かな夜を華やかに色付けた。

上弦の月が西に沈みかけている頃、沈黙を破ったのはガジマラだった。

「実は、僕も前までこの姿が嫌だったんだ。」

ケンムンは目をぱちくりさせて「えっ」と驚きの声を漏らした。

「おいらはガジマラが格好良くて、憧れなんだけど。」

ガジマラはそれには答えず、

「君は僕に付けられた別名を知っているかい。」

と続けた。ケンムンはブンブンと首を左右に振り、黙ってガジマラの言葉の先を待った。

『締め殺しの木』だよ。」

ガジマラは目の前に広がる空っぱの地面を見つめながら話し出した。

「元々、僕がいるこの辺りは、たくさん植物で溢れていたけれど、僕は全て枯らしてしまった。正確に言えば、枯らしたんだ。そして、僕の周りで次々に茶色へ変色していく彼らを見た村人がそう名付けた。鳥や蝶も皆、こ

れをネタにして僕を笑う、それが苦痛だった。」

そう言つて苦々しく笑つた。

「意思とは関係なく動くこの体が悪い、そう言い聞かせながら、他の植物たちに巻き付いていくうちに最後の一本を枯らしたとき、僕は何の為に生きているのか分からなくなつた。」

少しの沈黙が流れた後、ゆっくりと口を開いた。

「それでも今、こんな僕が子どもたちの遊び場所になつたり、誰かの住処として少しでも役に立つことが出来たりしているのであれば、それで上出来だと思うんだ。」
ケンムンへまっすぐ発せられた言葉は、しばらく二つの影を包み、そこに留まっていた。何も言わずガジマラの話聞いていたケンムンは、一言お礼を言い、あつという間に暗闇に姿を消した。

太陽が顔を出し始めたとき、いつもと同じように話をしていたガジマラたちの元へ伸びる影があつた。

「……うわさになつていゝ妖怪、おいらなんだ。怖がらせてしまつてごめんなさい。」

ケンムンは小さな体を丸めた。あちこちから驚きの声が上がつたが、歯を食いしばり、大きく息を吸つた。

「おいら、皆と仲良くなりたくて。」

返ってくる言葉が怖くて、ぎゅっと目をつぶつた。

「ようこそ、家族の一員へ。」

思いがけない言葉に目を白黒させた。ガジマラも、その周りに見える顔もたくさんの笑顔を咲かせているのを見たケンムンは、「ありがとう」と子どものように、ぱあつとあどけない表情を見せた。そして、澄んだ空気を胸いっぱい吸い込むと、黄金色の朝日に向かって勢いよく地面を蹴つた。